なお、本書を貴重書としたのは、固有の書名が唯一もちいられている以外に、他の二本の龍大写本には見られない「英重」銘（大谷大学本にもあり）と本書のみにある貴重な奥書とが存したからである。この銘は、冒頭の「興福寺奏達状法然上人流罪之事　貞慶解脱上人之御草」の下に見られるもので、本書を書写伝持した最初の人物かと思われる。史伝史料によれば英重には、(1)文永八年・文永十一年・建治三年（一二七一・一二七四・一二七七／大和春日神社文書）(2)元応三年（一三二一／山城海住山寺文書）(3)明徳二年・応永二十年（一三九一・一四一三／法隆寺文書・東大寺文書）の三名あったことが知られるが、興福寺や貞慶との関連性を考えると、(1)もしくは(2)の英重であった可能性が高い。いずれにせよ禿氏文庫所蔵の『奏達状』は今に残る『奏状』より古い時代の原本を書写したもので、長らく越後浄興寺に伝来襲蔵されていたものが明和の頃に畿内に弘通し、ついに臨全によって書写された非常に貴重な書籍であったといってよいであろう。

◇

本書の重要性は、何よりも『奏状』以前に貞慶の手によってすでに草稿本が書かれていた事実を如実に示す点にある。近年、前掲の龍谷大学写本二本を研究した城福雅伸氏は、これらを『奏状』の異本と認めながらも、悪意的に改竄された書であると見なした。そして、異本には「上人は智者なり云々」等々という法然擁護の文言がすべて削除されているとして、本来は宗教弾圧書ではない『奏状』を悪しく改竄し、宗教弾圧書であるかのように粉飾したと非難した。しかし、『奏達状』と『奏状』の全文を比較検討すれば一目瞭然であるが、明らかに『奏達状』の方が先に書かれていることがわかる。しかも、禿氏文庫本の存在によって、両書は名称さえも違う書物であることが明らかとなった。

当時、法然を擁護していたのは後白河上皇や九条兼実らであったが、後白河院が亡くなると、南都北嶺からの法然批判が激化してきた。そこで、貞慶は八宗を代表して「沙門源空勧むるところの専修念仏の宗義を糾改せられんこと」を求めて、まず『奏達状』を著したのである。その後、法然擁護派の圧力によるものか、改変された現行の『奏状』を著した。この『奏状』とて、表紙に「興福寺奏状案」とあるから、まだ案文であったことが知られる。

実は貞慶もごく初期に弥陀信仰を有していた。建久四年から五年（一一九三～一一九四）にかけては「念仏の単修」も試みているほどで、弥陀の十念来迎を強く願っていたことが諸文献によって確認できる。ところが、建久六年より貞慶は再び「広学」に転じた。すなわち、広く諸行を実践していく方向性に戻ったのである。その理由について貞慶は『観世音菩薩感応抄』において、「涯分を量らずして久しく願望を係ける」といい、凡夫であるにもかかわらず弥陀の勝れた三界出過の浄土を欣求していた愚を赤裸々に語るのである。この三界出過の難については『奏達状』や『奏状』にも、「至愚の者、たとい夙夜の功ありと雖も非分の職に任ぜず。下賤の輩、たとい奉公の労を積むと雖も卿相の位に進み難し。……しかるに偏に仏力を憑みて涯分を量らず。是れ則ち愚癡の過なり」と、明確に示されている。こうした浄土の法門についての両者の決定的な解釈の相違が一つの底流となり、そこに「破戒を宗とする」専修念仏者の悪行の数々が重なって、本寺である興福寺の要請を受けて書きあげたものが、本書『興福寺奏達状』であったと考えられるのである。なお、本書『奏達状』については、その翻刻も含め、あらためて別稿において示すことにしたい。

◇

以上のように、禿氏文庫には『興福寺奏達状』を初めとする貴重な和写本の存在が多数確認された。これらを用いた今後の研究の進展に大いに期待するところである。

◇研究概要報告◇

平成二十一（二〇〇九）年度本研究所の研究計画は、指定研究二件（継続一、新規一）、常設研究三件（継続一、新規二）、特別指定研究三件（継続三）、共同研究四件（継続二、新規二）、そして個人研究三件（新規三）が設置され、合計十五件の研究プロジェクトが構成された。次に示すような具体的な計画のもと、総研究員数二二七名の協力によって推進される。

研究成果として『佛教文化研究所紀要』第四十七集に共同研究他の報告論文六編、研究員報告一編、翻訳一編、セミナー報告一編の他、恒例の本研究所講演会の講演記録二編を収めた。善本叢書としては、『選択本願念仏集（延書）』（責任編集者　大田利生氏）、仏教文化研究叢書としては、『中世の文学と思想』（責任編集者　大取一馬氏）、『スピリチュアル・アフリカ』（責任編集者　落合雄彦氏）が出版された。永年の研究成果によるものである。

A　指定研究（龍谷大学図書館蔵の貴重書の研究・出版）

1、日本語日本文学　禿氏文庫本の研究（二年次）

主任・大取　一馬　　研究員三四名

（研究の目的）

本学図書館所蔵の禿氏文庫本は貴重な図書を多く収蔵しておりながら、その内容が多分野にわたっているため、これまで総合的な調査が行われないまま今日に至っている。本研究ではこの禿氏文庫本の全てを三年間で調査・研究し、三年目には当文庫の中、学術的に資料価値の高い貴重書を善本叢書として刊行し、四年目には文庫目録を付して『善本解題』を刊行する予定である。

（研究計画）

禿氏文庫が各分野にわたっているため、仏教・真宗・国史・文学の四分野の研究者が調査、研究に当たることになった。具体的には当文庫の写本・版本を中心に書誌カードを作成し、貴重本と思われる図書については、これをマイクロフィルムに撮り、紙焼きにして、それを基に詳しく調査研究することにしている。また諸本の伝本研究が必要な場合には、当該書の所蔵機関に出向いて比較研究を行い、当文庫本の位置付けを明らかにすることにしている。また場合によっては、思想的な方面の知識も必要となるので、研究会に参加して、その知識を得て調査に役立てることにする。特に本年度の研究としては、文庫の調査を進めると共に、その内容を精査し、貴重書、准貴重書、普通書に区分し、善本叢書に載せるべき書についてはその解題をまとめることにしたい。その他、一定の成果が得られた場合、当研究所のセミナーを通して公表することも考えている。

2、国史学「西本願寺宗意惑乱一件」文書を読み解く（一年次）

主任・平田　厚志　　研究員九名

（研究の目的）

龍谷大学大宮図書館に「西本願寺宗意惑乱一件」と題する全十六冊からなる古文書（写）が所蔵されている。本文書は、いわゆる「三業惑乱」騒動が発生した享和元年から騒動の終結に至る文化八年までの期間に記された「伺書」「答書」「趣意書」など、さまざまな個別文書を時系列的に全十六冊に収録したもので、「三業惑乱」騒動の全容を解明するための基本史料ともいえる貴重な史料である。本文書の解読と翻刻は、「三業惑乱」研究にとって不可欠であり、真宗教学史・教団史・教育史・思想史の研究者が、それぞれ専門分野の視点から読み解いて行こうとするものである。全作業を終了して翻刻の段階を迎えるまでには三～四年の期間を要すると思われるが、取りあえず初年度は、四～五冊読み了え、そのうちの重要文書に頭注・補註を付して、『仏文研紀要』誌上にその成果を報告できるようにしたい。

（研究計画）

近世西本願寺三大法論のうち、最大規模のものといわれる「三業惑乱」に関する基本史料である「西本願寺宗意惑乱一件」文書（全十六冊）を三年間三期に分けて読み解く予定である。すなわち第一期（二〇〇九年度）で、まず五冊（「一件」文書、一～五）、第二期（二〇一〇年度）で五冊（「一件」文書、六～十）、第三期（二〇一一年度）で残り六冊（「一件」文書、十一～十六）を原稿化する。その間、頭注・補注を作成し、かつ解読論文も順次作成して『仏文研紀要』で公表して行く。そして、二〇一二年度中に、龍谷大学善本叢書として刊行する予定である。

B　共同研究

1、教育学　仏教とカウンセリングの意義（二年次）

主任・友久　久雄　　研究員一一名

（研究の目的）

仏教とカウンセリング（臨床心理学）は、人の悩みを解決する方法という意味で、多くの接点があると考えられている。特に最近では、心理学の分野から仏教への関心が強まり、第四の心理学と言われる、トランス・パーソナル心理学が起こるにつれ、東洋思想の中心である仏教に対して、心理学的観点からの考察が求められるようになってきた。

また従来の日本では、人々の悩みについての解決方法として、各々の檀家寺の住職に相談するという伝統があった。しかし近年、社会が近代化され、その構造が複雑になるに従い、人々の悩みも多様化し、単なる人間性や経験だけでは対応しきれなくなってきた。このため、人々の悩みに対応するには、一定の知

識と技術が要求され、今日、多種多様なカウンセリングという概念ができあがり発展した。

一方、寺院においては、都市化が進むにつれ、いわゆる檀家離れが顕著になってきた。このような中で、近年、お寺の社会活動の一端として、壇信徒の心の悩みの相談に対応する方法としてカウンセリングの必要性が認められるようになってきた。

そこで本研究では、仏教でいうスピリチュアルな課題を、心理学的観点から検討し、日本人のスピリチュアル性を明らかにするとともに、宗教的な悩みと心理的な悩みについて比較検討することにより、その教学的研究と心理学的研究の統合を試みるものである。

具体的には、研究代表者を中心として、各自の研究テーマに従って、定期的に研究会を開き、研究成果を発表するとともに、同じ研究テーマを持つ人々との交流会（研修会）を開く。

〈初年度〉

仏教とカウンセリングの教学的・心理学的研究

浄土三部経・七祖聖経・教行信証・その他の浄土真宗聖典（和讃・歎異抄・御文書等）における教学的内容とカウンセリング理念の比較検討を行った。また、二〇〇八年度仏教文化研究所研究プロジェクト採用審査結果について、採用内定とともに「仏教の範囲が真宗学に限定されているような感じを受ける。もっと広い仏教的視点からの研究が必要ではあるまいか」とのコメントをいただいたので、李光濬氏にも研究員として参加を依頼し、広い視野からの研究活動を進めていった

〈本年度〉

仏教とカウンセリングの実践的統合の試みの研究

初年度の研究活動を推進するとともに、本年度は

(1) 理論を主として研究するグループ

(2) 実践を主として研究するグループ

に分け、これらの理論と実践の統合、具体的には、それぞれの実践のバックグランドになっている理論や教学を明かにする。

（研究計画）

尚、そのため具体的に活動している寺院に対しては、直接面接法や郵送法によるアンケート調査を実施し、本研究結果に対する整合性を検証するとともに問題点を明らかにする。

(3) 日本宗教学会に成果を発表するとともに、仏教文化研究叢書として刊行する。

2、仏教学　仏教と医療（二年次）

主任・長谷川　岳史　　研究員五名

（研究の目的）

本研究は、インド・中国・日本において仏教が様々な階層に支持された要因の一つとして、「僧侶が有していた医学」と「僧侶の医療行為」を重点的に検討することを目的とする。

古来より仏教と医療の結びつきは深く、インドでは教義研鑽の補助学として規定された五つの学術（五明）の一つに「医方明（chikitsā-vidyā）」を取り入れている。仏典の中にも『増一阿含経』や『金光明経』「除病品」などの三大患・三良薬説、『法華経』の良医喩、『根本説一切有部毘奈耶』「薬事」の記述など、教説の比喩として説かれる医術の他にも、当時、施されていた医術の様子や実際に使用されていた薬、主要な病名などが具体的に書かれているものも多く、僧侶が実際に医学を学び、それを実践していたことが予測できる。中国においても『隋書』経籍志に収録される「竜樹菩薩薬方」「婆羅門諸仙薬方」や、先述の三大患を収録する唐代の医書『千金方』（本学「写字台文庫」に存）のように、インドから仏教とともに伝わった医学情報が中国で定着しており、さらに唐代には僧侶が関わった悲田養病坊が設置されている。日本では、奈良から平安時代に寺院に救療施設が設置され、僧侶であり医者でもある僧医、またそれに準ずる看病僧の存在が確認でき、鎌倉時代には、叡尊や忍性とも関係が深く、中世最大の医学書『頓医抄』と『万安方』（本学「写字台文庫」に存、内容は『頓医抄』かもしれない）を著した僧医浄観房性全（梶原性全）がいる。

本研究では、上記のように数多く存在する仏教と医学・医療の関係に触れた文献を調査し、インド・中国・日本において、僧侶が保持していた医学情報の質や医療行為の具体的な内容、

またはその社会的影響を明らかにしたい。

〈研究計画〉

〈二〇〇八年度〉

インド・中国・日本における仏教と医学・医療の関係に触れた文献を調査。具体的な用例の抽出。研究談話会（一二月）の開催。

〈二〇〇九年度〉

前年度に抽出した具体的な用例の中から特筆すべきものを重点的に検討。研究談話会の開催。二年間の成果を論文発表。叢書発刊の準備。

3、哲学〈仏教〉思想の対話的研究 ―その座標軸を求めて―（一年次）

主任・高田　信良　研究員三名

〈研究の目的〉

本研究の主たる目的は、現代の宗教多元状況において全ての宗教が問われている根源的な課題、すなわち如何にして自己の信ずる宗教の真理性を弁証するのかという問題について、仏教思想の立場から研究を試みるものである。このような研究は、これまでキリスト教神学者や宗教哲学者を中心になされ、議論が深められつつある。しかし、残念ながら仏教に関わる研究者は、ともすれば仏教がいわゆる一神教と呼ばれる救済の宗教とは本質的に異なることを理由にして、他の諸宗教との対話的研究を通じて創造的に自己の真理性を主張することに未だ消極的である。確かに、仏教思想の歴史的展開は釈尊の体得した真理の哲学的な転釈の歴史に他ならず、その意味で仏教は元来、多元的な性格を持っているのも事実である。しかしながら、好むと好まざるとにかかわらず、急速にグローバル化減少が進み、多文化・多宗教との出会いが、時には紛争や戦争を引き起こす状況も現れるなかで、単に自己の宗教思想の特殊性を主張することにだけ沈潜し、ただひたすら保守的な態度をとるという姿勢は学問的には決して十分なものとはいえないと考える。

そこで、私たちの二年間の共同研究では、仏教（大乗仏教・浄土仏教）の立場から、「仏教〈外〉の諸宗教との対話」と「仏教〈内〉の諸教派との対話」という二つの対話的研究を通して、まずは宗教対話に関する研究に新しい可能性を見出すための座標軸を建てることを目的とするものである。また合わせて、本研究の進展が仏教の長い歴史的展開の中で創出されてきた仏教観（仏教研究）・真宗観（真宗研究）を、新たな視点から吟味するための知見を得ることにつながるものであることを述べておきたい。

〈研究計画〉

はじめに、各研究員が研究に関わる〈宗教対話〉をめぐる従来の議論をそれぞれ宗教哲学、仏教学、真宗学の領域より整理して、議論を共有する場と方法論を明確にする。その上で具体的な対話的研究を試みる。諸宗教との対話という場合、大きく仏教〈外〉の諸宗教と仏教〈内〉の諸教派との対話が考えられなければならない。前者については、ユダヤ教・キリスト教・イスラームなどや、日本の天理教や神道などの宗教研究者との研究交流を行う。後者については、仏教学・真宗学・宗教学・哲学・史学などの分野での仏教（各宗派）研究者との学際的・共同研究を行う。二年間という短い研究期間であるため、数多くある宗教の内、実際に対話を実施することのできる数は限られるが、少なくともかかる課題をめぐる研究の出発点となる座標軸を明らかにすることを主眼とし、その成果については研究期間終了の後、『仏教文化研究所紀要』に発表する予定である。

4、東洋史学　大谷文書の比較研究 ―旅順博物館蔵トルファン出土文書を中心に―（一年次）

主任・都築　晶子　研究員九名

〈研究の目的〉

本研究の目的は、大谷文書の漢語資料六千点と旅順博物館蔵トルファン出土文書の漢語資料三万点弱を中心に比較検討し、両者の関係を明らかにすることである。

周知のように、大谷探検隊将来トルファン出土文書は、すでに戦前から国内、韓国、中国の各地に流出した。近年、旅順博物館に所蔵されている大谷探検隊将来のトルファン出土文書の整理が進み、本学所蔵の大谷文書断片と綴合するもの、あるいは内容が関連するものなど、大谷文書と密接不可分な文書断片が多数含まれていることが明らかになってきた。このため、大谷文書と旅順博物館蔵トルファン出土文書との厳密かつ全体的

な比較研究が緊急の課題となっている。本研究では、ひとまず、以下の点を明らかにして、基礎的な整理を進めていきたい。

(1) 綴合する文書の確認

(2) 関連する文書についての整理

たとえば、官公庁文書であれば、一連のものとして作成された可能性のある文書の確認など。

(3) 副葬品の復元作業

もともと大谷文書は、墓の副葬品の作成に利用された反故紙である。これまで、大谷文書断片から墓の守護神「青龍」を復元することができた。他にも明らかに副葬品の一部とみられる文書断片があり、旅順博物館蔵トルファン文書との照合によって「もの」としての大谷文書の研究も大幅に展開することが期待できる。

（研究計画）

〈二〇〇九年度〉

1. 仏典については、二万六千点の断片を整理した旅順博物館・龍谷大学共編『旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典断片選影』（法蔵館、二〇〇六年）などにより、大谷文書の仏典写本断片と比較照合し、綴合するもの、同じ仏典の別の写本などについて、整理していく。
2. 官公庁文書、およびその他の文書については、郭富純・王振芬『旅順博物館蔵西域文書研究』（万巻出版公司、二〇〇七年）などにより、比較照合を進める。
3. いずれも、旅順博物館蔵トルファン出土文書の調査の主要メンバーでもあった仏教文化研究所・西域研究会の協力を得て、作業を進める予定である。
4. 大谷探検隊将来トルファン文書が所蔵されている機関について、京都周辺の調査を進める。

〈二〇一〇年度〉

1. 前年度の比較研究を継続する。
2. 大谷探検隊将来トルファン文書所蔵機関の調査（関東方面）。
3. 大谷文書漢語資料と旅順博物館蔵トルファン出土文書漢語資料との関係について、一定の結論に到達する。

C 常設研究

1、仏教史学　日本仏教史における神仏習合の研究（二年次）

主任・赤松　徹真　　研究員一一名

（研究の目的）

初年度は、日本仏教史における神仏習合に関わる各時代ごとの研究史の整理と関係史料の収集を中心に進めた。

第二年度は、各時代ごとの神仏習合をめぐる国家・朝廷・地域と仏教・教団、および図像・造形分野の関係史料の収集及び史料整理、分析・検討に引き続き取り組むこととする。

第三年目は、各時代ごとの神仏習合に関わる歴史事象及び図像・造形分野の関係史料の収集及び史料整理、分析・検討とともに、研究成果のまとめを行う。

（研究計画）

研究計画としては、従来の神仏習合に関わる研究史の整理として、各時代ごとの神仏習合及び図像・造形分野の調査・収集・整理に取り組み、それらの分析・検討を行い、各時代の担当者の研究進展を共有する。

研究方法としては、関係史料の調査・収集・整理に取り組み、その史料の読み解き方法については、仏教の宗教的立場を方法として、考察していくものとする。

初年度は、各時代ごとの関係史料の調査・収集・整理を行う。

第二年度は、引き続き各時代ごとの関係史料の調査・収集・整理を行うとともに、外部講師を迎えて公開シンポジウムを企画する。

第三年度は、関係史料の整理・分析・検討を通して、研究成果をとりまとめて、報告を重ねて、論集などの刊行を行う。また、外部講師を招き、公開シンポジウムを企画する。

2、真宗学　現代社会と浄土真宗（一年次）

主任・林　智康　　研究員二二名

（研究の目的）

混迷する現代社会において、浄土真宗の教えはどのように対応できるのか、また、苦悩する現代の人々を真宗の教学者は、いかに教え導くことが出来るのか。浄土真宗の教えの伝統を踏まえて、現代社会の諸問題に積極的に取り組み、各専門の領域の分野からの研究を進め、現代教学の樹立を試みたい。

現代社会の諸問題として具体的には、生命・環境・人権・家族・倫理・科学・平和・諸宗教等、様々な内容が考えられる。これらの諸問題は、現代社会を生きる人間にとって、直接・間接ともに深く関わっており、避けて通れない重要な課題である。そのため、各研究員の専門分野から問題の所在を明らかにし、研究を進めていく。

また、平成二一年度四月に、大学院において従来の文学研究科真宗学専攻に加えて、実践真宗学研究科実践真宗学専攻が開設される。それに伴って、真宗学科に所属する専任教員・特任教員と、実践真宗学研究科に所属する教員が、直接的あるいは間接的に連携し、相互に協力して、研究の成果を教育に還元すべくプロジェクトを遂行したい。

研究員の専門分野ごとにグループを作り、研究員が、それぞれ関心のある問題を中心に研究テーマを決め、研究会を定期的に開催することで、相互に研究内容を深めていく。

（研究計画）

・浄土教理史：大田利生・川添泰信・殿内恒・井上善幸・高田文英

・真宗教義学：内藤知康・那須英勝・杉岡孝紀・武田晋・玉木興慈

・真宗教学史：林智康・龍溪章雄・原田哲了

・真宗伝道学：深川宣暢・デニスヒロタ・嵩満也・鍋島直樹・藤能成・清岡隆文・田畑正久・吾勝常行・葛野洋明

初年度（二〇〇九年度）は、基礎的研究として、これまでの研究成果・資料を網羅的に収集し、先行研究を批判的に考察する。具体的には、研究員個々の専門領域（時代・分野）における、これまでの成果と今後の課題を明確にする。

次年度（二〇一〇年度）は、引き続き研究成果・資料の収集を継続しつつ、前年度までの成果を基礎として、過年度までの真宗学科常設研究「真宗伝道学の研究」「教理史における実践学の研究」「浄土教における救済思想の展開」の成果を援用し、各部門の研究グループに於いて発表をおこなうことを通して、研究員相互が問題意識を共有し、現代社会のかかえる諸問題を包みながら、浄土教における救済思想の意義を研究する。

最終年度（二〇一一年度）には、前年度までの成果を元に、研究員がそれぞれの担当領域・分野における研究論文を執筆する。

3、仏教学　唯識思想の研究（一年次）

主任・芳村　博実　　研究員二二名

（研究の目的）

唯識思想は、中観思想と並んでインド大乗仏教の根幹を成す思想である。それは、真諦や玄奘によって中国の地に紹介され、玄奘の弟子窺基によって法相宗として確立される。さらに、道昭らの入唐僧によって日本に伝えられ、南都六宗の一つとして法相唯識の思想は興福寺を中心に隆盛を極めた。

本研究の最終的な目的は、インドに発し、中国を経て、日本に伝わった唯識思想を歴史的・総合的に明らかにすることであるが、三年間の到達目標としては、「従来の研究経過・成果又は準備状況」の項で述べるように、既に進行中のプロジェクトである『大乗荘厳経論』の文献学的研究によってインドにおける初期唯識思想の本質を明らかにする。中期および後期のインド唯識思想については、それぞれの役割分担者が独自の研究を進めて行く。中国唯識思想については、平成二一年度のサバティカルを終えた後、長谷川岳史氏が参加されるのを期待している。日本唯識思想については、楠淳證氏が現在進行中の研究を続行して行く。

三年後の具体的な成果としては、『大乗荘厳経論』の第一章の翻訳研究（二〇〇八年度に出版）、第九章の翻訳研究（二〇〇八年度末に科学研究費の研究成果として公表予定）に続き、目下進行中の第一七章ほか重要章の翻訳研究を完成し、公表する。さらに『仏教文化研究所紀要』にそれぞれの研究参加者の学術論文を寄稿する。

（研究計画）

『大乗荘厳経論』の翻訳研究は、現在既に学期中の毎週木曜日夕方三時間程度大宮キャンパスにおいて行っている。参加メンバーは、研究組織を構成する芳村博実、桂紹隆、若原雄昭、

能仁正顕のほかに、荒牧典俊教授（京都大学・大谷大学を経て、現在光華女子大学）、早島理教授（滋賀医科大学）、さらに、本学の非常勤講師である内藤昭文、乗山悟、那須良彦、元非常勤講師である藤田祥道の諸氏が常時参加している。また、毛利俊英（筑紫女学園大学非常勤講師）、岩本明美（関西大学非常勤講師）、加納和雄（高野山大学専任助手兼助教）、五島清隆（仏教大学・同志社大学非常勤講師）神子上恵生（龍谷大学名誉教授）、那須円照（龍谷大学文学研究科博士課程修了）が随時参加している。これらの諸氏を研究協力者として本プロジェクトに参加していただく予定である。

通常、故長尾雅人先生が残された『大乗荘厳経論』の研究ノート（最初の二部が既に刊行済み）を出発点として、荒牧先生が独自の翻訳を提案されるのを受けて、全参加者がそれらを検討して毎回最も適切と思われる本文と翻訳を作成するという手続を取っている。写本との照合は、主として若原と藤田が随時行っている。目下進行中の一七章を平成二一年度の早期に終えて、残りの期間で他の重要な章の翻訳研究を行っていく。

芳村博実、桂紹隆、楠淳證は、それぞれインド中期唯識思想、インド後期唯識思想、日本唯識思想の研究を独自に続行する。

以上の研究の成果は、『仏教文化研究所紀要』『仏教学研究』『龍谷論集』あるいは各種学会誌に各自が発表して行く。

芳村博実は、研究代表者として常にプロジェクト全体の進捗状況を点検し、年に数度それぞれの研究成果を公開する談話会を開催する。

D　特別指定研究

1、大谷探検隊将来資料の総合的研究

主任・入澤　崇　研究員五四名

（研究の目的）

本研究は大谷探検隊が中央アジアで収集した資料（以下、大谷資料）の全容を明らかにすることを目的とする。探検隊が収集した資料は文字資料と美術考古資料に大別でき、本研究は現在主に文字資料に主眼をおいている。敦煌の石室から発見された「敦煌資料」、及びトルファン・クチャといったタクラマカン沙漠周辺のオアシス都市の遺跡から出土した「東トルキスタン出土資料」が主たる研究対象である。文字・言語・内容は多岐にわたり、断片であるために解読・同定作業はかなりの人員・時間を要する。

龍谷大学所蔵の大谷資料については研究がかなり蓄積されてきた。当面の目的は従来の人文学的手法に加えて、科学分析調査を行ない、資料保存のためにデジタルデータ化する作業を行なうことである。大谷資料は現在、日本・中国・韓国に分散されており、研究困難な状況が長らく続いていたが、大谷探検隊及び西域に関心が高まるにつれて各研究機関の門戸が徐々に開かれてきた。中国旅順博物館所蔵の大谷資料については、二〇〇二年より旅順博物館との共同研究が開始され、二六、〇〇〇点にも及ぶ漢文仏典断片の同定作業が日中双方で遂行された。さらに二〇〇八年度より同館所蔵の非漢字資料（ブラーフミー文字、ウイグル、ソグドなど）を対象としたプロジェクトが立ちあげられた。今後も研究の深化を計りながら、当該資料と姉妹関係にあるドイツ所蔵の漢文・非漢文資料も継続して探査していく。さらには中国国家図書館に所蔵されている敦煌出土の大谷資料も調査対象とせねばならない。

西域はシルクロードの名称に象徴されるように、従来インドと中国の通路としての価値を付されてきたが、本研究の進展により西域には独自の仏教文化が存在したことが明らかになりつつある。文字資料に加えて、今後は旅順博物館・韓国国立中央博物館・東京国立博物館に所蔵されている美術考古資料にも目を向け、最終的には大谷資料を全点カタログ化し、デジタル入力して世界に向けて発信したいと考えている。

（研究計画）

1．大谷探検隊将来文字資料の調査研究（代表：三谷真澄）

現在継続して行っている「敦煌写本」「トルファン写本」の研究を主になす。本年度は旅順博物館所蔵の非漢字資料の調査研究に焦点をあてる。そしてミュージアム開設に向けて、文字資料の展示手法を考案する

2. 大谷探検隊隊員の調査研究（代表：市川良文）

大谷光瑞をはじめとする大谷探検隊の隊員の研究を主になす。

本年度は探検以後の光瑞の足跡に焦点をあてる。特に、トルコでの光瑞の歩みを客員研究員のエルダル氏を中心にして追跡していく。

3. 西域仏教美術の調査研究（代表：宮治昭）

大谷探検隊将来の美術資料の研究を主になす。

本年度は当該分野の先駆者である熊谷宣夫の研究を見直すとともに、西域仏教美術の基盤であるガンダーラ美術の研究の深化をはかる。

4. 西域仏教遺跡の調査研究（代表：入澤崇）

大谷探検隊が行った遺跡の再調査と近年確認された遺跡の調査を主になす。

本年度はこれまで行ってきた仏教西漸の調査研究と、大谷探検隊以降の遺跡調査の成果をふまえ新たな遺跡調査の準備体制を整える

2、大正新脩大蔵経の増補・改訂に関する研究

主任・淺田　正博　研究員五名

（研究の目的）

本研究会は仏教系六大学と提携して、大正新脩大蔵経の増補・改訂を目的としていた。しかし各大学の事情が時代と共に変わってきた関係上、共同して一つの目的を完遂するという提携を維持することが難しくなった。そこで、六大学の合同研究は中止せざるをえなくなったが、各大学内に於いて大正新脩大蔵経の増補・改訂を目的としての個別研究は継続し、その成果をいつかは持ち寄る事を申し合わせて一応解消した。

そこで、龍大では、大正新脩大蔵経に未収録の貴重書籍や江戸時代に著されて各宗教義の研鑽に有用な注釈書類などを翻刻発刊することを目的として、まず龍大図書館に所蔵されている仏教関係の図書の再整理を目指した。折りしも図書館内部でも貴重の整理が進められ、特に仏教系図書の順が廻ってきたので、これと合流する形で進めてきたが、数年で成果が出るような仕事ではない。

（研究計画）

ところが一昨年来、仏文研の研究方針が大きく変えられ、とにかく毎年何らかの成果を出すように求められたので、急遽、方向転換し、大正大蔵経を利用した研究テーマを設けて、成果を早急に出せるような方向を模索した。

そこで出てきたのが『戒律辞典』の編纂である。

二〇年余り前に、本学の教授であった土橋秀高先生が生前に「戒律辞典」の編纂を模索され、一人で項目を集め、執筆に取りかかられた原稿が残されている。もちろん完成原稿ではないが、そのご苦労は大変なものであったと思われる。昔の事であったのでコンピューターもなく、大正大蔵経の出典を求めることも容易ではなく、かなりの数の項目が掲げられているものの、その解説には簡略なものが多い。そこで、これをすべてパソコンに取り入れて、今日の目から再度、執筆し直そうという計画を立てた。

今日の段階では、土橋先生の原稿をとにかくパソコンに全て打ち込んだ情況にある。

今後は、これを項目別に分別し、各専門の先生に依頼して大正大蔵経に直接あたっていただいて、内容を再吟味し、原稿を書き換えていただくことを考えている。また、戒律研究の専門である龍口先生に見ていただいて、これ以外の重要項目を検出し、それの執筆も依頼したいと考えている。現在のところ、充分な予算を組めた上で、辞典完成までには五年を要すると思われる。

3、仏教経典の翻訳と研究

主任・デニス　ヒロタ　研究員三九名

（研究の目的）

当会の目的は、国際的視野に立った浄土真宗の思想と教えの理解をさらに深めるための書物の翻訳、そして出版を奨励しサポートするものとする。その書物は当会を通して出版され、以下のようなものを含む。

・主要な仏教のテキスト（経典、論、伝統的な注釈書、重要な歴史の書物）

（研究計画）

・浄土真宗の思想と教えにおける現代の派生的文学（学問的・大衆的志向のアプローチのものを含む）

・浄土真宗の思想と教えにおける比較的・異宗教間的表現方法

〈仏典翻訳研究会の活動〉

・当会の主な活動は、特に日本浄土教の伝統の理解を深める主要な仏教テキストの翻訳の準備と再考である。

・当会はまた、当会の基本目標を推進する翻訳出版物、及びオリジナルの副次的研究の出版準備を奨励する。

・当会は、当会の基本目標を推進する公開講座・ワークショップ・シンポジウムを支援する。こうした講演等は、研究論文として出版され、当会を通して当会の出版物として書籍に編集される。

〈二〇〇九年から二〇一〇年の活動〉

この期間、二つの諮問委員会が毎週定例会議にて研究員により進められる。昨年度より続いて『八宗綱要』の諮問が続けられ、加えて『観経疏』「玄義分」の諮問の定例会議を、良忠等の日本での古くからの伝統的注釈書を参考として、本文の審議を行う。

・定例会議で審査が終わったテキストの出版準備を継続：『阿弥陀経』『無量寿経』『往生論註』

・当会からの講演の出版結果とともにある、現代的・比較的な事を背景とした浄土真宗思想の討論に関連したワークショップの計画

・特に海外の浄土真宗僧侶による一般大衆を対象とした原稿が、ダルマトーク（法話）シリーズ継続のために必要となる。

・当会の出版物を、インターネット上でアクセス可能にする。これは、世界中の読者に当会を紹介することとなり、出版物の販売増加につながるであろう。

・海外の浄土真宗寺院等のブックストアを通して、当会の出版物販売増加をはかる。

〈研究計画〉

(1) 『阿弥陀経』（二種の漢訳）の英訳：鳩摩羅什訳と玄奘訳の英訳原稿を諮問委員会に諮り、審議結果を反映した原稿ファイルも作成済みであり、現在最終的にannotation等の精査と作成。

(2) 『無量寿経』の英訳：康僧鎧訳と言われている漢訳本の英訳原稿はすでに諮問委員会にかけられ討議済み。現在、担当者より細部の調査。原稿作成・英訳に取りかかっている。

(3) 『往生論註』の英訳：上下二巻の英訳原稿は既に諮問委員会での討議が完了しており、現在用語説明等の脚注作成に取りかかっている。

(4) 『八宗綱要』の英訳：二〇〇六年度より本格的に開始された企画であり、現在諮問委員会で審議中である。本文献も難解なテキストであり、相当の時間を要する。

(5) 『観経疏』「玄義分」の英訳：二〇〇六年度より中国浄土研究会を立ち上げ、大学院生を中心に英訳原稿作成の研究を進めており、二〇〇九年度より諮問委員会に諮り始める

(6) ・Dharma Talk Series の出版：このシリーズは、浄土真宗本願寺派の海外開教区で永年にわたって開教に従事していた開教使諸師の執筆による法話集である。その出版は各方面から待望されていた。

E 個人研究

1、日英翻訳ソフトによる仏教用語の翻訳可能性について

東森　勲

（研究の目的）

市販されている日英翻訳ソフトを利用して、仏教用語をどれだけ正確に翻訳ができるかを、検討することが目的である。専門用語のこのような翻訳をより正確にするためには、このような翻訳ソフトが今後どのようにするべきかを、提案し、今後の仏教文化の海外での、布教活動などでの日本語から英語への橋渡しとなる研究と位置づける。このような基礎的研究はこれまでには行われていないようなので、今回の研究が第一歩となれば幸いである。使用するソフトは以下のものである。

(1) コリャ英和！一発翻訳2008 for Win

(2) ATLAS 翻訳スタンダード V14.0 富士通ミドルウェア (CD-ROM-2007)
(3) Power E/J 日英翻訳これ一本―Ver.1.0 シャープ
(4) 東芝、英日／日英翻訳ソフト『おまかせ翻訳 V1.0』
(5) BROTHER 英日・日英翻訳ソフト TransLand/JE Ver.4.0 ブラザー工業

（研究計画）

本研究では、日本語で仏教用語を入力して、それぞれの翻訳ソフトがどのような翻訳をするかをいくつかのタイプに分類しておこなってみる。次にそれらの評価を作成する。最後に言語処理の問題点、あるいは認知語用論からの翻訳への改善すべきかを提案する。

2、三業惑乱関連書籍の翻刻と注釈

殿内　恒

（研究の目的）

江戸幕府は宗教統制政策の一環として、仏教諸宗派の学問を奨励したが、実際の宗学研鑽は、研究教授機関の整備、修学体系の制度化、さらには印刷技術や出版事業によって可能となった。本研究は、近世における仏教研究と出版事業との関わりの一端を、浄土真宗本願寺派の教学論争である三業惑乱を手がかりに窺うものである。

三業惑乱は、本願寺派第六代能化功存（一七二〇～一七九六）が著した『願生帰命弁』（一七六四刊）に対する批判から始まったと言える。やがて天明年間になると、大麟（生没年不詳）や宝厳（生没年不詳）によって批判書が出され、以後十数年にわたり、主として批判論駁書の刊行を通して論争が繰り広げられていった。

しかしながら、従来の研究では『願生帰命弁』と、その論駁書である大瀛（一七五九～一八〇四）の『横超直道金剛錍』（一八〇一刊）のみに研究が集中し、『横超直道金剛錍』が出版されるまでの論争書のほとんどは、和綴本のまま翻刻されていない状況である。

本計画は、『横超直道金剛錍』が出版されるまでの論争書から代表的なものを翻刻し、併せて註釈的研究を行い、それらを公開していくことを目的とする研究の一環である。具体的には、三業惑乱に関連する第一次資料群を広く公開し、研究の一助とすることが本研究プロジェクトの第一次目標であり、従来の研究で等閑に付されがちであった、論争に関する書籍群の内容研究を行うことが第二次目標である。

これらの研究目的の達成に向けて、諸般の事情の中、二〇〇八年度に一年間限りで採択された共同研究「近世仏教における教学論争と書籍の刊行―三業惑乱を中心に―」（研究代表者：殿内恒）に引き続き、更なる基礎的研究を進展させるべく、このたび個人研究の形で申請を行うものである。

二〇〇八年度に共同研究「近世仏教における教学論争と書籍の刊行―三業惑乱を中心に―」でなされた研究内容を継続発展させる形で、『願生帰命弁』の翻刻ならびに註釈的研究、『願生帰命弁』への第一次批判書の翻刻ならびに註釈的研究を進めていき、さらには学林側からの第一次批判書への論駁書についての研究を目指していく。

具体的には、今年度は昨年度に引き続き、以下の方法で研究を進めていく予定である。

(1) 『願生帰命弁』翻刻データに基づく本文・註釈作成
(2) 第一次批判書翻刻データの作成、本文・註釈の検討
(3) 学林側からの第一次批判書への論駁書の調査・収集

（研究計画）

3、大瀛『浄土真宗金剛錍』と『横超直道金剛錍』の対照翻刻

井上　善幸

（研究の目的）

大瀛著『横超直道金剛錍』（一八〇一刊）は、本願寺派第六代能化功存（一七二〇～一七九六）が著した『願生帰命弁』（一七六四刊）に端を発する三業惑乱に、一定の終止符を打った論書である。三業惑乱における書籍公表による論争は十数年に及ぶが、大瀛が『横超直道金剛錍』の草稿本とされる『浄土真宗金剛錍』を著したのは、寛政九年（一七九七）とされる。『浄土真宗金剛錍』が著者の別名にて記されているのに対し、『横超直道金剛錍』は、大瀛の実名で刊行された書物である。また、草稿本と刊行本とでは、その主題は一貫するものの、編

述の体裁や論拠の取扱に相違が認められ、思索の深化という点のみならず、実名による刊行を意識した編集という点からも興味深い書物である。

この研究は、浄土真宗本願寺派の教学論争である三業惑乱を手がかりに、近世における仏教研究と出版事業との関連を総合的に検証する研究計画の一部をなすものであり、特に今回申請する二〇〇九年度個人研究計画では、『横超直道金剛錍』の刊行に至るまでの大瀛の思想展開、ならびに編集過程を探るための基礎研究として、『金剛錍』諸本の対照翻刻を行うものである

（研究計画）

現在、『金剛錍』の諸本は、龍谷大学図書館に所蔵されている。そこで、研究の準備段階として、『金剛錍』の写本類を中心に関連資料を収集し、研究作業用資料集を作成し、それらを基に翻刻作業を行う。

また、本研究は、三業惑乱関係論書の総合的研究の基盤をなすものである。したがって、翻刻作業にあたっては今後の注釈作業を念頭に置き、研究の進度に応じて、随時、引用・参照書籍等を確認しつつ注釈研究の予備的考察を行う。

具体的には、以下の手順で研究を遂行する予定である。

(1) 『金剛錍』諸本の関連資料の収集
(2) 『浄土真宗金剛錍』の本文データの入力及び校正
(3) 『横超直道金剛錍』の本文データの入力及び校正
(4) 『浄土真宗金剛錍』から『横超直道金剛錍』に至る諸本の比較検討
(5) 以上をふまえた注釈研究の予備的考察

◇平成二十一年度　兼任・客員研究員〈新規〉◇（順不同）

大取班

勝亦　智之（東山高校非常勤講師）
櫛井　亜依（京都造形芸術大学非常勤講師）
原田　水織（恩誓寺坊守）

平田班

平田　厚志（本学文学部教授）
龍溪　章雄（本学文学部教授）
岡村　喜史（本学文学部准教授）
三栗　章夫（浄土真宗教学伝道研究センター常任研究員）
川村　覚昭（大谷大学文学部教授）
知名　定寛（神戸女子大学文学部教授）
大原　誠（本願寺史料研究所研究員）
三嶋　信（博物館「飛騨民俗村」学芸員）
髙山　嘉明（本学文学研究科研究生）

長谷川班

桂　紹隆（本学文学部教授）

髙田班

髙田　信良（本学文学部教授）
杉岡　孝紀（本学文学部准教授）
長谷川岳史（本学文学部准教授）

都築班

都築　晶子（本学文学部教授）
佐藤　智水（本学文学部教授）
北村　高（本学文学部教授）
渡邊　久（本学文学部准教授）
市川　良文（本学文学部講師）
小田　義久（本学非常勤講師）
橘堂　晃一（本学非常勤講師）
猪飼　祥夫（東洋医学総研研究員）
李　済滄（南京師範大学講師）

赤松班

近藤俊太郎（本学非常勤講師）
中西　直樹（筑紫女子大学准教授）

林班

林　智康（本学文学部教授）
大田　利生（本学文学部教授）
内藤　知康（本学文学部教授）
川添　泰信（本学文学部教授）
龍溪　章雄（本学文学部教授）
深川　宣暢（本学文学部教授）
鍋島　直樹（本学法学部教授）
嵩　満也（本学国際文化学部教授）
杉岡　孝紀（本学文学部准教授）
殿内　恒（本学社会学部准教授）
武田　晋（本学文学部准教授）
玉木　興慈（本学短期大学部准教授）
井上　善幸（本学文学部准教授）
デニス　ヒロタ（本学文学部教授）
原田　哲了（本学文学部講師）
那須　英勝（本学文学部教授）
高田　文英（本学文学部講師）
藤　能成（本学文学部教授）
清岡　隆文（本学文学部教授）
田畑　正久（本学文学部教授）
吾勝　常行（本学文学部教授）
葛野　洋明（本学文学部教授）

芳村班

芳村　博実（本学文学部教授）
桂　紹隆（本学文学部教授）
若原　雄昭（本学理工学部教授）
楠　淳證（本学文学部教授）
能仁　正顕（本学文学部教授）
岡本　健資（本学文学部講師）
荒牧　典俊（京都光華女子大学教授）
早島　理（滋賀医科大学教授）
内藤　昭文（本学非常勤講師）
藤田　祥道（元本学非常勤講師）
乗山　悟（本学非常勤講師）
那須　良彦（本願寺派教学伝道研究センター専任研究員）
大西　薫（関西大学等非常勤講師）

加納　和雄（高野山大学助教）
毛利　俊英（筑紫女学園大学非常勤講師）
岩本　明美（関西大学非常勤講師）
神子上恵生（本学名誉教授）
那須　円照（元本学文学研究科）
五島　清隆（仏教大学非常勤講師）
狩野　恭（神戸女子大学教授）
志賀　浄邦（京都産業大学講師）
シュリーカントゥ・バフルカル（ティラク・マハーラーシュトラ大学教授）
入澤班
藤原　崇人（大谷大学真宗総合研究所共同研究員）
松井　太（弘前大学准教授）
エルダル・キュチュキュヤルチュン（トルコ日本研究学会理事）
中田　裕子（元本学文学研究科）
浅田班
相馬　一意（本学文学部教授）
芳村　博実（本学文学部教授）
鶴田　大吾（元本学文学研究科）
ヒロタ班
嵩　満也（本学国際文化学部教授）
北岑　大至（本学非常勤講師）
張　偉（同朋大学講師）
グレゴリー・ギブズ（Minister, Oregon Buddhist Temple）
ジョン・ロス・カーター（コルゲート大学教授）
チャールズ・ハリシー（ハーバード大学教授）
エリザベッタ・ポルク（本所客員研究員）
南　陽子（本学文学研究科研究生）

個人研究

東森　勲（本学文学部教授）
殿内　恒（本学社会学部准教授）
井上　善幸（本学文学部准教授）

二〇〇九年度龍谷大学沼田奨学金研究奨学金受給者及び外国人客員研究員

氏　名　ディリプ・クマル・バルア氏（バングラディシュ　ダッカ大学准教授）
研究課題　日本仏教の諸宗派　―その教義と歴史的展開の批判的比較研究―
指導教授　若原雄昭理工学部教授
研究期間　二〇〇九年四月一日～二〇一〇年三月三十一日

氏　名　エルダル・キュチュキュヤルチュン氏（トルコ　ボスポラス大学社会科学研究所）
研究課題　大谷光瑞の生涯とその事績：中央アジア探検とトルコ訪問
指導教授　三谷真澄国際文化学部准教授
研究期間　二〇〇九年四月一日～二〇一〇年三月三十一日

氏　名　鄭　堆（Dramdul）氏（中国中国蔵学研究中心宗教研究所所長）
研究課題　アティシャ大師とチベット仏教の道次第理論について
指導教授　桂紹隆文学部教授
研究期間　二〇〇九年四月一日～二〇〇九年七月三十一日

李学竹氏（中国　中国蔵学研究中心宗教研究所助理研究員）
研究課題　『プラサンナパダー』第18章「自我の考察」の解読と漢訳
指導教授　桂紹隆文学部教授
研究期間　二〇〇九年四月一日～二〇〇九年七月三十一日

氏　名　ジョン・ロス・カーター氏（アメリカ　コルゲート大学教授）
研究課題　Christian and Shin Buddhist Thought: Considerations of Paul, Augustine and Luther
指導教授　デニス・ヒロタ文学部教授
研究期間　二〇〇九年六月一日～二〇〇九年六月三十日

氏　名　ヴァンサン・エルトシンガー氏（スイス　オーストリア学士院研究員）
研究課題　『瑜伽師地論・菩薩地・真実品』の翻訳・研究
指導教授　桂紹隆文学部教授
研究期間　二〇〇九年九月一日～二〇〇九年十二月十五日

イアン・ジェイムズ・マクマレン氏（英国　オックスフォード大学東洋研究所元教授、英国学士院会員）
研究課題　十七世紀日本における仏教と儒教の間の論争
指導教授　桂紹隆文学部教授
研究期間　二〇〇九年十月十五日～二〇〇九年十二月十五日

二〇〇九年度龍谷大学外国人客員研究員

氏　名　アヌ　チン・マルマ氏（バングラディシュ　ダッカ大学研究員）
研究課題　一、日本における大乗仏教の存在形態　―ケース・スタディ―
二、バングラデシュにおけるマルマ族仏教徒の儀礼―誕生・婚姻・死の社会学的調査―
指導教授　若原雄昭理工学部教授
研究期間　二〇〇九年九月一日～二〇一〇年三月三十一日

氏　名　王小甫氏（中国　北京大学歴史学部教授）
研究課題　隋唐五代時期の東北アジア地区関係史
指導教授　木田知生文学部教授
研究期間　二〇〇九年八月十日～二〇〇九年十二月十日

◇研究所日誌◇

―平成二十年度（後期）―

十一月二十二日（土）　午後三時～午後四時三十分
第七回研究談話会（武田研究班）
会　場　大宮学舎西黌三階小会議室
講　題　北米開教の課題と将来
講　師　中垣顕實氏（北米開教区ニューヨーク本願寺仏教会駐在開

教使）

十二月一日（月）　午後六時～

第八回研究談話会（赤松研究班）

会　場　大宮学舎本館二階会議室

講　題　中世前期の文字本尊―親鸞名号本尊の前後―

講　師　下間一頼氏（本所客員研究員）

十二月四日（木）　午後五時三十分～

第五回研究談話会（友久研究班）

会　場　大宮学舎北甍二〇二教室

講　題　仏教とカウンセリングの意義

講　師　友久久雄氏（本学文学部教授）

十二月十一日（木）　午後四時四十五分～午後六時十五分

第二回仏教文化セミナー

会　場　大宮学舎西甍二階大会議室

総合テーマ　仏教と医療

講　題　共同研究「仏教と医療」の趣旨

講　師　長谷川岳史氏（本学文学部准教授）

講　題　罹病者への説法

講　師　岡本健資氏（本学非常勤講師）

講　題　医療する僧侶―古代・中世における「僧医」の存在―

講　師　長崎陽子氏（本学非常勤講師）

十二月十二日（金）　午後五時四十五分～

第九回研究談話会（殿内研究班）

会　場　大宮学舎西甍三階小会議室

講　題　功存の『願生帰命弁』と卞関の『帰命弁』

講　師　那須良彦氏（本学非常勤講師）

講　題　近世前期の通俗仏書―浅井了意を中心に―

講　師　和田恭幸氏（本学文学部准教授）

十二月十八日（木）　午後五時～午後六時十五分

第六回研究談話会（桂研究班）

会　場　大宮学舎西甍二階大会議室

講　題　龍谷大学図書館蔵『行願寺沙門某勧進状』『心石集』『爛葛藤』について

講　師　新倉和文氏（本所客員研究員）

講　題　燕京図書館蔵『顕密即身成仏考』について

講　師　道元徹心氏（本学文学部准教授）

一月十六日（金）　午前十時四十五分～午前十一時四十五分

第三回仏教文化セミナー

会　場　大宮学舎第一情報教育実習室

講　題　仏教用語から現代日本語への意味変化―関連性理論による分析―

講　師　東森勲氏（本学文学部教授）

一月十九日（月）　午後六時～

第十回研究談話会（赤松研究班）

会　場　大宮学舎本館二階会議室

講　題　寛正四年康永作東光寺不動明王及び二童子像と熊野本宮護摩堂

講　師　大河内智之氏（和歌山県立博物館学芸員）

二月二十五日（水）　午後十二時～午後一時

第七回運営会議開催

1．二〇〇八年度個人研究の辞退について

土屋和三教授の健康不良に伴う辞退が承認された。

2．二〇〇九年度運営体制・運営会議構成員について

浅田正博文学部教授が次期所長に選出された。運営会議構成員は、前掲のとおり選出された。

3．二〇〇九年度兼任研究員・客員研究員について

提案どおり承認された。

4．二〇〇九年度沼田奨学金（研究奨学金）受給者の推薦審査及び外国人客員研究員の任用について

ジョン・ロス・カーター氏（アメリカ）が推薦、任用された。

5．沼田奨学金（研究奨学金）推薦に関わる推薦所見の提出について

提案どおり承認された。

三月九日（月）　午後六時三十分～

第十二回研究談話会（赤松研究班）

会　場　大宮学舎本館二階会議室

講　題　東アジアにおける納経と埋経

講　師　濱口芳郎氏（本学非常勤講師）

三月十三日（金）　午後五時～午後六時

第十一回研究談話会（吉川研究班）

会　場　大宮学舎北甍一〇一教室

講　題　寺社における「対話」とカウンセリングに関する仮説生成研究

講　師　吉川悟氏（本学文学部教授）

―平成二十一年度（前期）―

四月二十日（月）　午後三時～午後六時

第一回研究談話会（入澤研究班）

会　場　大宮学舎清風館共同研究室三〇一・三〇二

講　題　文明の活断層に揺れる人々の心

講　師　エルダル・キュチュキュヤルチュン氏（トルコ日本研究学会理事、本所客員研究員）

四月二十二日（水）　午後十二時三十分～午後一時十五分

第一回運営会議開催

1．二〇〇九年度研究体制・役員について

前掲のとおり承認された。

2．二〇〇九年度兼任・客員研究員の追加・取消について

提案どおり承認された。

3．二〇〇九年度研究所予算について

提案どおり承認された。

4．二〇〇九年度研究談話会開催について

提案どおり承認された。

5．二〇〇九年度仏教文化講演会について

今年度も二回開催することが承認された。

6．二〇〇九年度仏教文化セミナーについて

今年度も三回開催することが承認さ

れた。

7．二〇〇八年度研究プロジェクト研究年次経過報告書の審査について

昨年度と同様に審査を行うことが承認された。

8．二〇〇九年度沼田奨学金（研究奨学金）受給者の推薦審査及び外国人客員研究員の任用について

イアン・ジェイムズ・マクマレン氏（英国）が推薦、任用された。

9．二〇〇九年度外国人客員研究員の任用について

王小甫氏（中国）が任用された。

10．外国人客員研究員の研究室について

提案どおり承認された。

四月二十七日（月）　午後六時～午後八時

第二回研究談話会（高田研究班）

会　場　大宮学舎本館一階応接室

講　題　宗教多元状況における〈仏教〉思想の研究

講　師　高田信良氏（本学文学部教授）

コメンテータ　杉岡孝紀氏（本学文学部准教授）

長谷川岳史氏（本学文学部准教授）

五月二十七日（水）　午後十二時四十分～午後一時十分

第二回運営会議開催

1．二〇〇八年度研究プロジェクト研究年次経過報告書審査について

提案どおり承認された。特別指定研究及び研究種別のあり方については、今後常任委員会で検討することとなった。

2．第七十三回仏教文化講演会について

後掲のとおり開催が承認された。

3．二〇〇九年度仏教文化セミナーについて

後掲のとおり第四回仏教文化セミナーの開催が承認された。なお、開催回数の表記は通番号とすることが確認された。

六月二十五日（木）　午後三時～午後四時三十分

第四回仏教文化セミナー

会　場　大宮学舎西甍二階大会議室

講　題　A Critical Study of Yongjia Xuanjue's Biographies（永嘉玄覺之傳記再考）

講　師　黄繹勳氏（台湾　法鼓佛教研修学院　助教授）

通　訳　桂紹隆氏（本学文学部教授）

六月二十六日（金）　午後三時～午後四時三十分

第三回研究談話会（ヒロタ研究班）

会　場　大宮学舎清風館三階仏典翻訳研究室

講　題　『法句経』の英訳について

講　師　ジョン・ロス・カーター氏（コルゲート大学教授・本所客員研究員）

六月三十日（火）　午後一時十五分～午後二時四十五分

第七十三回仏教文化講演会

会場　大宮学舎清和館三階ホール

講題　大谷探検隊将来断片資料の追跡をめぐって

講師　片山章雄氏（東海大学文学部教授）

七月八日（水）　午後十二時三十分～午後一時十五分

第三回運営会議開催

1．二〇一〇年度研究プロジェクト募集について

提案どおり承認された。

2．二〇一〇年度専任研究員の募集について

提案どおり承認された。

応募締切日・・十月十六日

3．二〇一〇年度善本叢書・仏教文化研究叢書の出版助成募集について

提案どおり承認された。

応募締切日・・十月十六日

4．二〇一〇年度沼田奨学金（研究奨学金）受給者の推薦審査及び外国人客員研究員の任用について

ジグメー・ツルティム氏（チベット）が推薦、任用された。

5．二〇〇九年度外国人客員研究員の任用（延長）について

アヌ・チン・マルマ氏（バングラデシュ）の延長が、ビザ更新を条件に承認された。

七月二十七日（月）　午後六時～

第四回研究談話会（赤松研究班）

会　場　大宮学舎西甍三階小会議室

講　題　奈良時代の千手観音菩薩像について

講　師　中野聰氏（本所客員研究員）

十月二十一日（水）　午後十二時三十分～午後一時五分

第四回運営会議開催

1．二〇一〇年度研究プロジェクト採用審査について

提案どおり承認された。

2．二〇一〇年度「個人研究」の追加募集について

1の結果に伴い、追加募集することが承認された。

3．二〇一〇年度専任研究員について

該当なし。

4．二〇一〇年度出版助成（善本叢書・研究叢書）の予算案について

左記のとおり承認された。

（一）善本叢書　『禿氏文庫本（仮）』大取一馬　思文閣出版

（二）研究叢書　『問答と論争の仏教―宗教的コミュニケーションの射程』　マルティン・レップ（申請者：井上善幸）　法蔵館

5．二〇一〇年度沼田奨学金（研究奨学金）受給者の推薦審査及び外国人客員研究員の任用について

寧欣氏（中国）、ティモシー・フェローズ・フィッツジェラルド氏（英

国)、ホルスト・ラシッチュ氏(オーストリア)、李学竹氏(中国)、アン・マクドナルド氏(カナダ)が推薦、任用された。

6. 第七十四回仏教文化講演会について

後掲のとおり開催が承認された。

7. 仏教文化セミナーの開催について

後掲のとおり第五回、第六回仏教文化セミナーの開催が承認された。

8. 二〇〇九年度客員研究員の追加について

提案どおり承認された。

9. 二〇〇九年度客員研究員の科学研究費補助金研究者名簿への登録について

提案どおり承認された。

10. 図書費の取り扱いについて

常任委員会で審議することとなった。

十月二十六日(月) 午後六時〜

第六回研究談話会(赤松研究班)

会 場 大宮学舎本館二階会議室

講 題 天皇制国家と清沢満之—「精神主義」研究の前提—

講 師 近藤俊太郎氏(本学非常勤講師・客員研究員)

十月三十日(金) 午後五時三十分〜午後七時

第五回研究談話会(平田研究班)

会 場 大宮学舎清風館共同研究室三〇二

講 題 大和における三業惑乱について

講 師 奥本武裕氏(奈良県立同和問題関係資料センター係長)

十一月九日(月) 午後一時十五分〜午後二時四十五分

第五回仏教文化セミナー

会 場 大宮学舎清和館三階ホール

講 題 浄土真宗と「いのり」—宗教多元の中で、「行と信」の主体性—

講 師 藤能成氏(本学文学部教授)

コメンテータ 共同研究メンバー(高田信良)

十一月十六日(月) 午後三時〜午後六時

第七回研究談話会(入澤研究班)

会 場 大宮学舎清風館共同研究室三〇一・三〇二

講 題 中央アジアにおける哀悼儀礼

講 師 イセンビケ・トガン氏(トルコ科学アカデミー会員・トルコ中東工科大学名誉教授)

十一月十八日(水) 午後十二時三十分〜午後一時

第五回運営会議開催

1. 二〇一〇年度 研究プロジェクト〈個人研究・追加募集分〉採用審査について

提案どおり承認された。

2. 二〇一〇年度沼田奨学金(研究奨学金)受給者の推薦審査及び外国人客員研究員の任用について

プラポンサック・コンカーラッタナラック氏(タイ)、トーマス・シーアン氏(アメリカ)、チャールズ・ハリシー氏(アメリカ)が推薦、任用された。

3. 図書費の取り扱いについて(継続)

希望があれば事務局へ申し出ることとなった。

4. 新春技術講演会ポスターセッション出展について

昨年と同様に出展することが決定した。

十一月二十六日(木) 午後五時〜午後六時十五分

第六回仏教文化セミナー

会 場 大宮学舎西甍二階大会議室

講 題 禿氏文庫蔵「うらしま」「富士の人穴」について

講 師 櫛井亜依氏(京都造形芸術大学非常勤講師)

十一月三十日(月) 午後五時三十分〜

第八回研究談話会(赤松研究班)

会 場 大宮学舎本館二階会議室

講 題 近世中期の神宮寺の僧侶と国学者の関係

講 師 浦西勉氏(奈良県文化財保存課)

十二月三日(木) 午後五時〜午後七時

第九回研究談話会(芳村研究班)

会 場 大宮学舎西甍二階大会議室

講 題 瑜伽行唯識思想における五事と三性の成立について

講 師 荒牧典俊氏(京都光華女子大学教授・真宗文化研究所長)

十二月十四日(月) 午後五時三十分〜

第十回研究談話会(赤松研究班)

会 場 大宮学舎本館二階会議室

講 題 江戸時代における熊野本宮の神仏分離と仏像の移動

講 師 大河内智之氏(和歌山県立博物館学芸員)

十二月十八日(金) 午後一時十五分〜午後二時四十五分

第七十四回仏教文化講演会

会 場 大宮学舎本館講堂

講 題 宗教情操教育はなぜ必要か—特に真宗門徒の宗教倫理に関する調査研究を踏まえて—

講 師 口羽益生氏(岐阜聖徳学園大学・短期大学部学長、本学名誉教授)

平成二十一年十二月二十六日発行
龍谷大学 仏教文化研究所
代表者 淺田正博
六〇〇—八二六八
京都市下京区七条通大宮東入
大工町一二五—一
電話〇七五(343)三三一一(代)
内線5400

仏教文化研究所規程

設　立　　昭和三六年四月一日
制　定　　昭和六三年一二月一日
一部改正　　平成四年一月一六日
　　平成六年六月九日
　　平成一一年一一月二五日
　　平成一三年九月二七日
　　平成一四年五月一六日
　　平成一五年五月一五日
　　平成一九年七月五日

第一章　総　則

第一条　この規程は、龍谷大学学則第七〇条に定める仏教文化研究所（以下、「仏文研」という。）について、その組織及び運営等必要な事項を定めることを目的とする。

第二条　仏文研は、龍谷大学大宮学舎内に置く。

第三条　仏文研は、仏教文化及びその関連領域に関する総合的学術研究並びに国際的研究交流を行ない、もって学術研究の向上に寄与することを目的とする。

第四条　仏文研は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 仏教文化及びその関連領域に関する研究・調査
(2) 研究・調査に必要な図書・資料及び情報の収集、管理
(3) 紀要、叢書、所報等研究成果の刊行
(4) 研究会、公開講座、講演会等の開催
(5) 国内外の大学及び研究機関との研究交流
(6) その他前条の目的を遂行するために必要な事業

第二章　運営会議

第五条　仏文研に、重要な事項について審議・決定するため、仏教文化研究所運営会議（以下、「運営会議」という。）を置く。

二、次の各号に掲げる事項は、運営会議において決定する。

(1) 事業計画に関すること
(2) 研究所予算に関すること
(3) 指定研究、プロジェクト研究の設置・廃止に関すること
(4) 研究員及び委託研究員の受入れに関すること
(5) その他仏文研における重要な事項

第六条　運営会議は、次の各号に掲げるもので構成する。

(1) 所長及び副所長　六名
(2) 文学部教授会が選任する者　一名
(3) 短期大学部教授会が選任する者　若干名
(4) 学長が指名する者
(5) 専任研究員
(6) 研究部事務部長

二、前号第二号、第三号、及び第四号及び第五号による者の任期は、一年とする。ただし、再任を妨げない。

第七条　運営会議は、所長が必要と認める都度招集し、所長は会議の議長となる。

第八条　運営会議は、構成員の過半数の出席により成立し、議事は出席者の過半数の同意により決定する。

第三章　組　織

第九条　仏文研に研究調査部及び事業部を設ける。

二、研究調査部は、第四条に規定する事業のうち、研究及び調査並びに各指定研究及び各プロジェクト研究の推進・調整に関する事業を分担する。

三、事業部は、第四条に規定する事業のうち、資料の収集・整理及び研究成果の公刊並びに研究交流等に関する事業を分担する。

第一〇条　仏文研に、特定の課題を研究する指定研究を置く。

第一一条　仏文研に、常設研究プロジェクト・特別指定研究プロジェクト及び時限研究プロジェクトを置く。

二、常設研究プロジェクトは、次のとおりとする。

(1) 真宗学研究プロジェクト
(2) 仏教学研究プロジェクト
(3) 仏教史学研究プロジェクト

三、特別指定研究プロジェクトは次のとおりとする。

(1) 西域文化研究会
(2) 仏典翻訳研究会
(3) 大蔵経学術用語研究会

四、時限研究プロジェクトは、必要の都度設置する。

第一二条　仏文研に設置する指定研究及びプロジェクト研究は、研究の活性化・高度化を推進するために運営会議が必要と認める場合「付属研究センター」を呼称することができる。

二、付属研究センターの運営等については別途に定める。

第四章　職員組織

第一三条　仏文研に、所長及び副所長各一名置く。
二、所長は、仏文研の業務を統括し、仏文研を代表する。
三、副所長は、所長を補佐し、所長事故ある時はその職務を代理する。
四、所長及び副所長は、運営会議の推薦する者に対して、学長が任命する。
五、所長及び副所長の任期は、二年とする。ただし再任を妨げない。

第一四条　第九条に定める部に、主任一名を置く。
二、主任は、各部の業務を調整処理する。
三、主任は、本学（短期大学部を含む。以下同じ。）の専任教育職員の内から、運営会議において選任する。

第一五条　第一一条に定める研究プロジェクトには、それぞれ主査一名を置く。
二、主査は、当該研究プロジェクトを主宰しその活動を調整推進する。
三、主査は、本学専任教育職員の内から、運営会議において選任する。

第一六条　運営会議の決定事項の執行及び委任事項の処理並びに日常業務の連絡・調整を図るため、所長のもとに常任委員会を置く。
二、常任委員会は、次の各号の者で構成する。
(1)　所長及び副所長
(2)　第一四条に定める主任
(3)　運営会議が選任する者　若干名
(4)　仏文研課長
三、常任委員会には、必要に応じて主査を加えることができる。

第五章　研究員

第一七条　仏文研に、次に掲げる研究員を置く。
(1)　専任研究員
(2)　兼任研究員
(3)　客員研究員
(4)　嘱託研究員

第一八条　専任研究員は、仏文研に所属する専任教育職員で、専ら研究・調査に従事する者をいう。
二、専任研究員の任用については、別に定める。

第一九条　兼任研究員は、仏文研の活動に参加する本学の専任教職員をいう。
二、兼任研究員は、所長が候補者を推薦し、学長が委嘱する。ただし、その候補者が専任教育職員である場合は、その候補者の所属する教授会の承認を得るものとする。
三、専任教職員は所長に対して、兼任研究員となることを願出ることができるものとする。
四、兼任研究員の任期は、一年間又は二年間とする。ただし、再任は妨げない。

第二〇条　客員研究員は、学外の研究者でその身分のまま一定期間仏文研に所属して、研究・調査活動に従事する者をいう。
二、客員研究員は、所長が候補者を推薦し、運営会議の承認を経て、学長が委嘱する。

第二一条　嘱託研究員は、前三条に規定する以外の者で仏文研の活動に参加する者をいう。
二、嘱託研究員の任用は、前条第二項の規程を準用する。

第二二条　仏文研は受託研究員を受入れることができる。
二、受託研究員の受入れについては、別に定める。

第六章　補則

第二三条　仏文研に、仏文研の事務を処理するため仏文研事務室を置く。
二、仏文研事務室に、必要な事務職員を置く。

第二四条　この規程の改正又は廃止は、運営会議の発議により大学評議会において決定する。

付　則
この規程は、昭和六三年一二月一日から施行する。
二、この規程の施行に伴い、従前の仏教文化研究所規程（昭和六三年四月一日施行）は、廃止する。
三、この規程施行当初の所長は、第一二条の規定にかかわらず従前の規定による所長があたるものとし運営会議は第六条の規定にかかわらず従前の規定による協議委員を以て構成するものとする。

付　則（平成四年一月一六日題名、第一条改正）
この規程は、平成四年一月一六日から施行する。

付　則（平成六年六月九日第六条第四号選任母胎の改正）
この規程は、平成六年六月九日から施行する。

付　則（平成一一年一一月二五日第一一条研究プロジェクトの改正）
この規程は、平成一二年四月一日から施行する。

付　則（抄）（平成一三年九月二七日第六条改正）
この規程は、平成一三年四月一日から施行する。

付　則（平成一四年五月一六日第六条第二号改正）
この規程は、平成一四年四月一日から施行する。

付　則（平成一五年五月一五日第一五条改正）
一、この規程は、平成一五年四月一日から施行する。
二、この規程の施行に伴い、現に、仏教文化研究所事務室事務長にある者は、この規程による課長とみなす。

付　則（平成一九年七月五日第一二条新設、第一三条以下繰下、第一六条改正）
この規程は、平成一九年七月五日から施行する。

360.8/CHU/81 清真大典
360.8/CHU/82 清真大典
360.8/CHU/83 清真大典
360.8/CHU/84 清真大典
360.8/CHU/85 清真大典
360.8/CHU/86 清真大典
360.8/CHU/87 清真大典
360.8/CHU/88 清真大典
360.8/CHU/89 清真大典
360.8/CHU/90 清真大典
360.8/CHU/91 清真大典
360.8/CHU/92 清真大典
360.8/CHU/93 清真大典
360.8/CHU/94 清真大典
360.8/CHU/95 清真大典
360.8/CHU/96 清真大典
360.8/CHU/97 清真大典
360.8/CHU/98 清真大典
360.8/CHU/99 清真大典
360.8/CHU/100 清真大典

360.8/CHU/101 民間寶卷
360.8/CHU/102 民間寶卷
360.8/CHU/103 民間寶卷
360.8/CHU/104 民間寶卷
360.8/CHU/105 民間寶卷
360.8/CHU/106 民間寶卷
360.8/CHU/107 民間寶卷
360.8/CHU/108 民間寶卷
360.8/CHU/109 民間寶卷
360.8/CHU/110 民間寶卷
360.8/CHU/111 民間寶卷
360.8/CHU/112 民間寶卷
360.8/CHU/113 民間寶卷
360.8/CHU/114 民間寶卷
360.8/CHU/115 民間寶卷
360.8/CHU/116 民間寶卷
360.8/CHU/117 民間寶卷
360.8/CHU/118 民間寶卷
360.8/CHU/119 民間寶卷
360.8/CHU/120 民間寶卷

RESEARCH INSTITUTE FOR BUDDHIST CULTURE
Ryukoku University (RIBC)
Kyoto, Japan December 2009.

267/ZEN/83 禅宗全書
267/ZEN/84 禅宗全書
267/ZEN/85 禅宗全書
267/ZEN/86 禅宗全書
267/ZEN/87 禅宗全書
267/ZEN/88 禅宗全書
267/ZEN/89 禅宗全書
267/ZEN/90 禅宗全書
267/ZEN/91 禅宗全書
267/ZEN/92 禅宗全書
267/ZEN/93 禅宗全書
267/ZEN/94 禅宗全書
267/ZEN/95 禅宗全書
267/ZEN/96 禅宗全書
267/ZEN/97 禅宗全書
267/ZEN/98 禅宗全書
267/ZEN/99 禅宗全書
267/ZEN/100 禅宗全書
267/ZEN/101 禅宗全書
203.1/DAI/3 大藏経篇
203.1/DAI/4 大藏経篇
203.1/DAI/5 大藏経篇
360.8/CHU/1 藏外佛經
360.8/CHU/2 藏外佛經
360.8/CHU/3 藏外佛經
360.8/CHU/4 藏外佛經
360.8/CHU/5 藏外佛經
360.8/CHU/6 藏外佛經
360.8/CHU/7 藏外佛經
360.8/CHU/8 藏外佛經
360.8/CHU/9 藏外佛經
360.8/CHU/10 藏外佛經
360.8/CHU/11 藏外佛經
360.8/CHU/12 藏外佛經
360.8/CHU/13 藏外佛經
360.8/CHU/14 藏外佛經
360.8/CHU/15 藏外佛經
360.8/CHU/16 藏外佛經
360.8/CHU/17 藏外佛經
360.8/CHU/18 藏外佛經
360.8/CHU/19 藏外佛經
360.8/CHU/20 藏外佛經
360.8/CHU/21 藏外佛經
360.8/CHU/22 藏外佛經
360.8/CHU/23 藏外佛經
360.8/CHU/24 藏外佛經
360.8/CHU/25 藏外佛經
360.8/CHU/26 藏外佛經
360.8/CHU/27 藏外佛經
360.8/CHU/28 藏外佛經
360.8/CHU/29 藏外佛經
360.8/CHU/30 藏外佛經
360.8/CHU/31 三洞拾遺
360.8/CHU/32 三洞拾遺
360.8/CHU/33 三洞拾遺
360.8/CHU/34 三洞拾遺
360.8/CHU/35 三洞拾遺
360.8/CHU/36 三洞拾遺
360.8/CHU/37 三洞拾遺
360.8/CHU/38 三洞拾遺
360.8/CHU/39 三洞拾遺
360.8/CHU/40 三洞拾遺
360.8/CHU/41 三洞拾遺
360.8/CHU/42 三洞拾遺
360.8/CHU/43 三洞拾遺
360.8/CHU/44 三洞拾遺
360.8/CHU/45 三洞拾遺
360.8/CHU/46 三洞拾遺
360.8/CHU/47 三洞拾遺
360.8/CHU/48 三洞拾遺
360.8/CHU/49 三洞拾遺
360.8/CHU/50 三洞拾遺
360.8/CHU/51 東傳福音
360.8/CHU/52 東傳福音
360.8/CHU/53 東傳福音
360.8/CHU/54 東傳福音
360.8/CHU/55 東傳福音
360.8/CHU/56 東傳福音
360.8/CHU/57 東傳福音
360.8/CHU/58 東傳福音
360.8/CHU/59 東傳福音
360.8/CHU/60 東傳福音
360.8/CHU/61 東傳福音
360.8/CHU/62 東傳福音
360.8/CHU/63 東傳福音
360.8/CHU/64 東傳福音
360.8/CHU/65 東傳福音
360.8/CHU/66 東傳福音
360.8/CHU/67 東傳福音
360.8/CHU/68 東傳福音
360.8/CHU/69 東傳福音
360.8/CHU/70 東傳福音
360.8/CHU/71 東傳福音
360.8/CHU/72 東傳福音
360.8/CHU/73 東傳福音
360.8/CHU/74 東傳福音
360.8/CHU/75 東傳福音
360.8/CHU/76 清真大典
360.8/CHU/77 清真大典
360.8/CHU/78 清真大典
360.8/CHU/79 清真大典
360.8/CHU/80 清真大典

	会
057/91/34	六道の思想と美術：研究発表と座談会
057/91/35	仏師康尚の時代：研究発表と座談会
081/ＲＹＵ/20	彦根藩井伊家文書浄土真宗異義相論：「承応の闘牆」を発端とする本願寺・興正寺一件史料
081/ＲＹＵ/24	中世の文学と思想
002.6/703/10	漢方の臨床
002.6/703/11	漢方の臨床
002.6/703/12	漢方の臨床
422.04/ＣＨＵ/1	中國藏黒水城漢文文獻
422.04/ＣＨＵ/2	中國藏黒水城漢文文獻
422.04/ＣＨＵ/3	中國藏黒水城漢文文獻
422.04/ＣＨＵ/4	中國藏黒水城漢文文獻
422.04/ＣＨＵ/5	中國藏黒水城漢文文獻
422.04/ＣＨＵ/6	中國藏黒水城漢文文獻
422.04/ＣＨＵ/7	中國藏黒水城漢文文獻
422.04/ＣＨＵ/8	中國藏黒水城漢文文獻
422.04/ＣＨＵ/9	中國藏黒水城漢文文獻
422.04/ＣＨＵ/10	中國藏黒水城漢文文獻
267/ＺＥＮ/1	禅宗全書
267/ＺＥＮ/2	禅宗全書
267/ＺＥＮ/3	禅宗全書
267/ＺＥＮ/4	禅宗全書
267/ＺＥＮ/5	禅宗全書
267/ＺＥＮ/6	禅宗全書
267/ＺＥＮ/7	禅宗全書
267/ＺＥＮ/8	禅宗全書
267/ＺＥＮ/9	禅宗全書
267/ＺＥＮ/10	禅宗全書
267/ＺＥＮ/11	禅宗全書
267/ＺＥＮ/12	禅宗全書
267/ＺＥＮ/13	禅宗全書
267/ＺＥＮ/14	禅宗全書
267/ＺＥＮ/15	禅宗全書
267/ＺＥＮ/16	禅宗全書
267/ＺＥＮ/17	禅宗全書
267/ＺＥＮ/18	禅宗全書
267/ＺＥＮ/19	禅宗全書
267/ＺＥＮ/20	禅宗全書
267/ＺＥＮ/21	禅宗全書
267/ＺＥＮ/22	禅宗全書
267/ＺＥＮ/23	禅宗全書
267/ＺＥＮ/24	禅宗全書
267/ＺＥＮ/25	禅宗全書
267/ＺＥＮ/26	禅宗全書
267/ＺＥＮ/27	禅宗全書
267/ＺＥＮ/28	禅宗全書
267/ＺＥＮ/29	禅宗全書
267/ＺＥＮ/30	禅宗全書
267/ＺＥＮ/31	禅宗全書
267/ＺＥＮ/32	禅宗全書
267/ＺＥＮ/33	禅宗全書
267/ＺＥＮ/34	禅宗全書
267/ＺＥＮ/35	禅宗全書
267/ＺＥＮ/36	禅宗全書
267/ＺＥＮ/37	禅宗全書
267/ＺＥＮ/38	禅宗全書
267/ＺＥＮ/39	禅宗全書
267/ＺＥＮ/40	禅宗全書
267/ＺＥＮ/41	禅宗全書
267/ＺＥＮ/42	禅宗全書
267/ＺＥＮ/43	禅宗全書
267/ＺＥＮ/44	禅宗全書
267/ＺＥＮ/45	禅宗全書
267/ＺＥＮ/46	禅宗全書
267/ＺＥＮ/47	禅宗全書
267/ＺＥＮ/48	禅宗全書
267/ＺＥＮ/49	禅宗全書
267/ＺＥＮ/50	禅宗全書
267/ＺＥＮ/51	禅宗全書
267/ＺＥＮ/52	禅宗全書
267/ＺＥＮ/53	禅宗全書
267/ＺＥＮ/54	禅宗全書
267/ＺＥＮ/55	禅宗全書
267/ＺＥＮ/56	禅宗全書
267/ＺＥＮ/57	禅宗全書
267/ＺＥＮ/58	禅宗全書
267/ＺＥＮ/59	禅宗全書
267/ＺＥＮ/60	禅宗全書
267/ＺＥＮ/61	禅宗全書
267/ＺＥＮ/62	禅宗全書
267/ＺＥＮ/63	禅宗全書
267/ＺＥＮ/64	禅宗全書
267/ＺＥＮ/65	禅宗全書
267/ＺＥＮ/66	禅宗全書
267/ＺＥＮ/67	禅宗全書
267/ＺＥＮ/68	禅宗全書
267/ＺＥＮ/69	禅宗全書
267/ＺＥＮ/70	禅宗全書
267/ＺＥＮ/71	禅宗全書
267/ＺＥＮ/72	禅宗全書
267/ＺＥＮ/73	禅宗全書
267/ＺＥＮ/74	禅宗全書
267/ＺＥＮ/75	禅宗全書
267/ＺＥＮ/76	禅宗全書
267/ＺＥＮ/77	禅宗全書
267/ＺＥＮ/78	禅宗全書
267/ＺＥＮ/79	禅宗全書
267/ＺＥＮ/80	禅宗全書
267/ＺＥＮ/81	禅宗全書
267/ＺＥＮ/82	禅宗全書

Buddhism and provide valuable information to Buddhist historians. The importance is how we read them in order to understand the historical meanings behind the discrepancies.

Bibliography

Sun Changwu 孫昌武, Kinugawa Kenji 衣川賢次, Nishiguchi Yoshio 西口芳男, eds. *Zutang ji* 祖堂集. Beijing: Zhonghua shuju 中華書局, 2007.

McRae, John. "Shen-hui and the Teaching of Sudden Enlightenment." In *Sudden and Gradual Approaches to Enlightenment in Chinese Thought*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1987.

Shinohara, Koichi. "From Local History to Universal History: The Construction of the Sung T'ien-t'ai Lineage." In *Buddhism in the Sung*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 1999.

Weinstein, Stanley. "Buddhism, Schools of: Chinese Buddhism." *The Encyclopedia of Religion*, v. 2. Edited by Mircea Eliade. New York: MacMillan Publishing Company, 1987.

◇研究所収書目録◇

〈平成二〇年度登録図書一覧〉

081/ＫＯＮ/32	アジア研究：文化の多様性と現代化
081/ＫＯＮ/94	社会の安全と公共政策
081/ＫＯＮ/95	明治日本とイギリス
081/ＫＯＮ/96	媽祖等にみる海事信仰の文化と伝播：日本・琉球・中国・韓国における民間文化交流の研究
081/KON/97	現代の青少年問題への対応について
298.2/ＨＯＫ/2006	法鼓山年鑑
259/ＡＯＹ/	No estas solo
259/ＡＯＹ/	Reaching out：experiences in clinical pastoral education
259/ＡＯＹ/	You are not alone
203/ＢＩＢ/10	A guide to the earliest Chinese Buddhist translations : texts from the Eastern Han 東漢 and Three Kingdoms 三國 periods
201.9/122/3	Bibliographical sources for Buddhist studies : from the viewpoint of Buddhist philology
208/ＳＴＵ/14	The stanza of the bell in the wind : zen and nenbusu in the early Kamakura period
069/ＴＯＫ/	博物館における保存学の実践と展望：国際シンポジウム報告書：臨床保存学と21世紀の博物館
421.03/ＮＩＫ/2007	日本における韓国・朝鮮研究研究者ディレクトリ
201.8/ＫＡＮ/	阿羅漢
201.8/ＫＡＮ/	金沢文庫の仏像
201.8/ＫＡＮ/	寺院に響く妙音：企画展
709.2/ＴＯＫ/7	東京国立博物館文化財修理報告
069/ＴＯＫ/17	東京国立博物館図版目録
266.8/ＣＨＩ/13	報恩院流胎蔵界念誦次第の手引き：動潮撰『胎蔵界念誦次第伝授手鑑』訳注
422.035/ＴＯＫ/13	唐研究
422.004/ＴＯＮ/10	敦煌吐魯番研究
017.3/ＩＮＴ/10	List of publications received
295.6/ＳＯＴ/2005	曹洞宗宗勢総合調査報告書
709/ＧＡＮ/	元興寺文化財研究所創立40周年記念論文集
574/ＮＩＨ/25	山梨・山口の民俗芸能
299.9/ＧＡＮ/2007	元興寺文化財研究所研究報告
410.075/ＧＡＮ/	中の池遺跡・平池東遺跡：中の池遺跡第13次調査・平池東遺跡第３次調査：総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
002.6/703/9	漢方の臨床
206.4/ＣＨＵ/9	中國敦煌壁畫全集
574/ＮＩＨ/26	奈良の民俗芸能
206.2/ＢＵＫ/11	曼荼羅集玄証本
057/91/33	天平写経とその周辺：研究発表と座談